

「調」と「藻」——平野萬里『わかき日』への田中峰月書入れについて

多田 蔵人

近代作家旧蔵書研究会がはじまった。研究会報告も回数を重ね、私も正宗白鳥旧蔵書複製（日本近代文学館所蔵）に見える書入れを調べ、白鳥の小説観について発表の機をいただいた。この報告については旧蔵書の調査を整えつつ別に論考を用意しているので、ここでは架蔵の一冊、平野萬里『わかき日』（明治40・3、左久良書房）への書入れについてご報告したいと思う。

平野萬里は雑誌「明星」の歌人として、あるいは與謝野鉄幹・北原白秋・木下杢太郎・吉井勇との九州紀行『五足の靴』（明治40・8・8〜9・10「東京二六新聞」）の著者として知られる。『わかき日』は萬里が生前に刊行した唯一の歌集である。鉄幹は新詩社の後進歌人たちに一冊ずつ歌集を出させる叢書を計画していたが、一人目になるはずだった高村光太郎が辞したため、『わかき日』がこの企ての第一冊となった。序言には明治37年から39年までの、「與謝野氏「鉄幹」の教を乞ひしもの前後千を以て数へつべ」き歌から選んだとは言っているけれども、鷗外や啄木とも深いかかわりを持った萬里の、「明星」から「ス

バル」への曲がり角にあった歌の姿を、『わかき日』は伝えている。

架蔵本は初版、カバー欠。装幀と挿画を担当した和田英作の、蝶を描いた挿絵は残る。出版年時について、国立国会図書館蔵本（請求記号・特 22-94）は出版年月日を「明治40・5」とするが、架蔵本と立命館大学図書館白楊荘文庫蔵本には発行日を「明治四十年三月一日」と印刷しており、「三」に線を二本くわえて「五」とし納本したものであることがわかる。表紙をめくると遊び紙に墨筆で「峰月持」、さらにTとHの文字を組みあわせたマークが書入れてあり「田中」の印が添う。巻末の遊び紙にはやはり墨筆で、抹消された短歌一首（「若き日 思ひぬ老ひしと」以下まったく判読不明。「」は判読不能文字）と「峰月所有」の書入れ、そして「田中」の印あり。所持者が複数箇所にも名前を書く例は、明治本では珍しくない。

田中峰月は福岡の投書家。雑誌「文庫」明治40年9月15日号には「筑前 田中峰月」の名で「おん心、ひそかに来り、わが姿をば、萩垣に、のぞけるけはひ、夕月のしぬ」「あやぶみつ、言ひしわが謎、解せぬ顔にて、眉動く、あなうつくしき、少女子なれば」の二首が載り、『直方市史』（昭和46）には明治39年1月4日と明治40年1月7日の「福岡日日新聞」掲載の峰月の詩を引く。「文庫」明治40年9月1日号の六号活字欄には「福岡の一文士」の署名で、「殆んど一年ぶりで帰省した処がめざましく我福岡県下の短歌会は異動して居る、皆旧倍の発達はあるが就中、三角紫虹、廣瀬鷗舟、田中峰月等は最も発達して居る」

とあり、同じ記事には「新詩社の寛、萬里、白秋、勇氏等の来県はさまで人は注目しなかつた、福岡の歓迎会も至極寂しかった」ともある。峰月は『五足の靴』の五人組を福岡で迎えた詩人グループのメンバーと考えてよいだろう。本書は博多・大橋の古書肆本々堂にて購求、一緒に買った本には佐佐木信綱の『思ひ草』初版カバー付もあつたから、福岡の、短歌に志あつた方の思いに触れる機会だったのかもしれない。

本書に見える峰月の書入れは、「文庫」の投書家世代たちによる「明星」の受けとめかたを示すだけでなく、「明星」のありえた歌風進展の方向を指し示すものでもある。歌の載る頁への書入れは主として朱筆で、数カ所墨筆による後筆（抹消、追加）あり。歌の上に「○」「◎」「・」「△」「×」「レ」の点が打たれ（点のない歌もある）、字句の右傍に「、」「。」「△」の圈点を打つ。

こうした記号の意味が現在と異なることは、たとえば巻の三（明治39年の歌）の、

うまし、恋し、美しく、されば、束の間つかの、君を思はぬわれを憐む。

わが前に甘泉殿の絵のひとの来しといひなば驚きますや。

君に行く、蘭の香かしみしおん胸の園をしたひて生れし蝶は。

死なむとはえこそ誓はぬ臆心おくしんのあさましびとを君は抱いだきぬ。

わだつみを夢みぬ、いとも大いなる潮しほみつ胸に君を包むと。

かへり見る、月こそ照らせ、菩提樹の白露は君がみ髪ぐしのうへに。

の六首がならば見開き頁で「うまし、恋し、」「君に行く、」「死なむとは」「わだつみを」の上に「△
抜」を打ち、右頁欄外上部に「萬里君当時全盛曾妻に別るゝ前の歌なり 本帳の最高雅韻ならんか」と書
入れがある点に見てとることができるよう（注1）。

右の書入れで萬里と妻との別れに触れ、このあと「いつ、いかに、いづくに得たる君なりし、知らねば
安く一年を経ぬ。」の歌に「次第に調下れど藻うまし」と評を付しているように、峰月は『わかき日』を
時系列にそった配列の歌集として、歌物語を読むように読んでいたと考えられる。「藻」つまり詞藻ゆた
かな詩人が、「明星」の新進歌人だった玉野花子と恋し、結婚し、そして死別を迎えるゆくたてを、「調」
が高まり静まってゆく過程と捉える視線である。

峰月が『わかき日』に聞きとった「調」とは何か。それはおそらく右の「うまし、恋し、」一首が示す
ような、感情のたかぶりや深まりを音数操作によつて示す方法だった。

み車のわれは先追ひ、そよかぜの童と申し、靄の帳を朝ごとに曳く。

峰月はこの歌に一度「誤調を忌む？」と書いた後朱筆で抹消し、「三十八字詩」と書入れている。五七
五七七の三十一音にさらに七音（五七調そのものを破る音数ではない）を加えた萬里の詩法について、は
じめ破調のおだやかな形と捉えてみた後、「三十八字」——a b/a b/b bの韻律でなければ表現でき
ない意味を発見するのである。「靄の帳を朝ごとに曳く。」とのどやかに詠われた七七の風景と前四句と

の関係は、「考へれば、／ほんとに欲しと思ふこと／有るやうで無し。／煙管をみがく。」（啄木『悲しき玩具』明治45）の第五句が前四句に対して持つ反歌的な役割に近い。先ほど見た峰月の

あやぶみつ、言ひしわが謎、解せぬ顔にて、眉動く、あなうつくしき、少女子なれは

には、少々あぶなつかしい調子ながら、彼が聞きとった「三十八字詩」の斬新さが響いているのだろう。

「よく知れる人とは七尺しちしゃくをへだてて居たり、知らざるごとく。」に「頗る、、、」と書入れ、「月更けぬ、薄すいのなかのきりぎりす我が衰へに似るを奏でて。」の上に「×」を打っているように、峰月は『わかき日』に禁忌の恋が招きよせる緊張と恋を取りまく静かな叙景との対比を読もうとしていて、それがこうした「調」への感性をするどくしたとも言える。『わかき日』では、やはり三十八音の歌である

力なき蛙眼かへるめを張り空そらを見る、骨なき蚯蚓ち地を見る、日暮る。

にも「秋の日暮を妙に言へり」と評を加えている。末尾の「日暮る」が「空そらを見る」蛙と「地ちを見る」蚯蚓に対し、韻によって連絡しつとも屹立した光景としてあらわれる、いわば音による短歌内反歌の方法として、峰月は「明星」の歌を捉えていた。

かえって明治大正詩史において白秋や萬里の特徴であるとされることの多い詩語の横溢ぶりの方が、「いつ、いかに」、「歌を「藻うまし」と評しているとは言っても、むしろ峰月には追隨しにくいものだったかもしれない。

峰月の書入れの多くは語彙に関する注で、「篋くご」(「篋くごの音を聞くと夢みし常緑樹のこの林にか君おはすべき。」)をはじめ朱筆で「何事ならんか」と書き、後から朱で「クダラゴト」(百済琴)と語義を書きそえた箇所、あるいは「鬼督郵はぐま」(「月あかり、夢のやうなる櫛か葉はの鬼督郵はぐまを分けて谷を渡りぬ。」)に「何の事をや言ふ」と書入れた後で「草の名にして幽谷にあり長一尺計り成長す葉は枇杷に似て鋸齒なく背に毛なし櫛葉、とも言へば楓葉、」と註する箇所などがそれにあたる。

「我われはひとり、君はかしこの少女らと榛の実を拾ひし夕ゆふべ。」への「三七の作なれば斯く藻古りし」?」との書入れが示すように、年を追うごとに晦渋な詩語の輝きを好むようになった萬里や白秋の歩みを、峰月は十分に知っている。注釈を書き添えつつ読む方法は彼らの歌風に添ったものでもあり、「傀儡くぐい」(「世わすれしざれ技わざをかし、かかる宵よひ、傀儡饗くぐいせむ、一椀の酒。」)への「偶人ヲ歌ニ合セテ舞ハスル技デクゲツクワライ 後専ラ女技トナリ転ジテ舞妓トナリ」以下墨筆抹消、判読不能」という書入れは現在この歌を理解する上で大いに参考になるし、「一閭浮提」(「な忘れそ、一閭浮提もろともに在あれとひとしくおきてられし身。」)への書入れ「仏にある名と思ふ、謡か、」には経典と謡の調子が混線しはじめていた明治後期の聴覚のありかを見ることが出来るだろう。しかし外来語となると注釈のレベルはぐつと下がる。「オオリン」(「秋の野すきの薄うすの如くオオリンの弓こそなびけ、楽がくの風吹く。」)に「楽器 ヴァイオリンの略語也」と書込み、「イソルデ」や「バイソオ」に朱筆で書いた不審を墨筆で真つ黒に塗

り潰さなければならなかった峰月の言葉の世界は、たとえば上田敏『海潮音』（明治38）の「秋の日の平オロンの」には共振しなかっただろう。

音とパトスの相関を追いながら『わかき日』を学んでいたこの歌人の姿は、九州行をひとつのきつかけとして東西の詩語をエキゾチックに駆使してゆくことになった『五足の靴』の人々が、向きあわなければならなかった課題を教える。やがて斎藤茂吉や、ちよつと下つて萩原朔太郎が音によつて詩の内在律を発見しようとして試みてゆく日本語詩歌、「調」——「しらべ」と訓むのだと思う——による理解から逃れられずにいる定型詩の世界に、どのように語彙の多様化によるイメージの構築方法を溶け込ませてゆくか。萬里の歌を一心に読んだ田中峰月の言葉は、彼が憧れた対象とすれちがうことによつて、明治期詩歌のもつた課題を浮かびあがらせてくれるのである。

注1 「萬里君当時全盛曾妻に別るゝ前の歌なり」は墨筆。朱筆の「口中前籍にて盗みしし」を塗り潰すように書かれている。

※架蔵『わかき日』田中峰月書入れ本は、国文学研究資料館に寄贈予定である。